

## 七一氷河観測 2002—2004 年

坂井 亜規子 (名古屋大学環境)

オアシスプロジェクトで酒泉から車で 3, 4 時間ほど南の祁連山脈へ行ったところにある七一氷河に 2002 年から 2004 年の 3 年間通うことができた。

2002 年, 私は融解期の前後に氷河に行ったのみで, うちの研究室の松田君が融解期を通して観測を続けてくれた。この年の夏は雨が多く融解期終わりの 9 月をはじめに行って氷河の表面が真っ黒だったことに驚いた。この黒い物質はクリオコナイトという藻類が泥玉をつくってびっしりと氷河上を埋め尽くしているためであった。同行したクリオコナイトの専門家の竹内さんは大喜び。この氷河はクリオコナイトのお陰で氷河表面が黒くなり, (太陽光がよく吸収されて) 融解が促進されているんだ! 仕事の際はザックをおろして直接氷河上に置かなくてはいけないのだが, 仕事を終わった後にザックを持ち上げると真っ黒。一度汚れたザックはなかなかきれいにならなかった。。【教訓 1: 氷河に行くときはザックカバーを忘れるな。】

2003 年, この年は SARS のために融解期前期は現地に入れなかった。8 月によく現地入りしたのであるが, 雨が少なく乾燥していて, 融解期後半だというのに 2002 年に比べ氷河は白い。気温は低くて氷河の融解水はちよろちよろと流れているだけ。ベースキャンプは氷河末端から 3 km ぐらいの氷河からの流出する河川の近くに設置しており, その河川の水を調理に使っていたのだが, 流出水が少ないためにベースキャンプまで下ってくる間に河床にしみこんでしまっ、ベースキャンプ前の川は干上がり, かるうじて流れのある上流まで行って大きなタンクに水を汲むのが日課であった。オアシスプロジェクトの発表では, 「オアシスや沙漠の人々にとって山岳域に降る雨は重要な水資源で・・・」などと枕詞で使うが, 我々はまさに 100% 七一氷河の流出河川に頼らざるを得ない生活をしていた。

この観測が終わり, 帰国して名古屋空港から留守本部の竹内さんに帰国報告の電話をしたが, そのときの私の最初の一言は「今年の氷河は白かったよ!」であ

る。【教訓 2: 毎年同じ気象とは限らない。】

2004 年は 5 月末から 9 月まで滞在した。この年のイベントは 7 月末にやって来た。4800m ぐらいの調査地点で仕事をしていると, 遠くの景色がモヤがかすみダストがやってくるのが眺められた。あつという間に迫ってきて, 氷河を下るときはダストの中。風は強くなかったのでマシだったが, 氷河表面が汚れ融解水も緑色に濁っていた。ベースキャンプへ戻ってきてもダストのため視界が悪い。夕方になって雨が降り始め, 空中のダストがようやく雨とともに落ちてくれた。7 月はそれまで雨が少なかったためしみこまず, 表面流となって一気に流れ下ったらしい, ベースキャンプ横の川もあふれて濁流となっていた。事件はその後。水位計を 2 台 (とも) 氷河からの流出河川に設置していたのだが, 2 台ともケーブルがぶち切れているのが見つかった。水位計本体だけでも助かったのが幸いか。。? しかしこれから融解の始まりと言うときに水位計が無く, データがとれないのは痛かった。【教訓 3: 予備の一台はいざというときののために取っておけ。】



写真 1 濁流となった七一氷河からの流出河川  
(2004 年 7 月)

2002~2004 年まで毎年違った顔を見せてくれ, 沢山のことを教えてくれた七一氷河であった。